
リトル・ジャッキー（バカ）

temso

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトル・ジャッキー（バカ）

【Nコード】

N2172A

【作者名】

temso

【あらすじ】

大スターに尋常でない憧れを抱く少年のお話。バカは、いい。

鋭い拳が放たれる。男の顔面にめり込んで、男をぶっ飛ばした。拳の次は重い蹴りだ。ハイキックがスキンヘッドの頭部に炸裂。ハゲはぶっ倒れた。

お次はビリヤードのキュー。槍のように自由自在にそれを操り、彼は襲い来る敵を次々となぎ倒していく。

彼にとっては、ただの椅子も立派な武器だった。両足でつかんで椅子を振り回す。

そして並み居る敵を片付けて、彼は時限爆弾を無事解除し、この町を救ったのだった。

彼は最強だ。彼にかかればマフィアだろうがテログループだろうが、物の数ではなかった。

エンディング。スタッフロールが流れる。とともに、NGシーンも流れた。

彼は何回も同じセリフでかんでいた。

「だって、難しいもん」

派手なアクション。洗練された立ち回り。そして随所に光るユーモア。

映画の終わり、彼は言った。

「じゃあ、またね」

テレビの前で拳を握り締め、息を荒くしてる少年がいた。

目が画面に釘付けた。よく見ると全身がプルプル震えている。

「か……」

少年は叫んだ。

「かつこいいいいいいい！！」

「……！！」

その隣には耳を押さえて眉にしわを寄せる少年がいた。

「なんなんだよ」

「だってさ！見ただろ！？すげえよな！ババツ！ビシツ！ってさ
！」

興奮して手足を振り回す彼に、少々押され気味にこたえる。

「あ、ああ。うん、そ、そだな」

「ああ……いいよなあ。ジャツキー様。すげえよなあ……」
今度は恍惚とした顔になる。

「っていうかさ、浩志」

恍惚とした表情のまま、浩志と呼ばれた少年は振り返った。

「なに？」

その不気味な顔にひるみながらも、彼は言った。

「お前がどうしても見せたかったものって、これかよ？」

「そうだよ」

「先週も見なかった？」

「違う。何言ってるんだ、お前」

浩志少年は、思い切りバカにした顔で友人を見た。

「先週見たのは、これの前作だぞ」

「……知るかよ」

「まあ、いいや。さ、次の見ようぜ！」

嬉々としてビデオデッキの中の大量のビデオテープをがさがさやる浩志に、彼——宮本大輔はため息をついた。

何で俺、こんな奴の友達になっちまったんだろ。

大輔と浩志は、同じ中学の同級生である。それも、一年のときか

ら今、つまり三年生まで、ずっと一緒なのだ。

何で友達になったのかはさっぱり覚えていないし、別に覚えてる必要もないと思っている。

ただ困っていることは、彼がかの有名なジャッキー・チェンの大ファン（マニア）だということだ。週末には決まって『ビデオ見ようぜ！』と言ってくる。

いい迷惑だが、そのせいでジャッキー出演の映画を全部覚えてしまった。

だが、浩志の本当のぶっ飛び具合はこんなもんじゃなかった。

「決めた」

ある日突然、浩志が言い出した。

「大輔。俺、ハリウッドに行く」

「は？」

「とめるなよ。無駄だからな」

放課後、帰り道のことだ。

大輔は目を点にしていた。

「俺は、第二のジャッキー様になるんだ」

中学三年生、夏。そろそろ真剣に進路を考えなきゃならないときに、こんな突飛なことを言い出した友人を、大輔はしんそこ心配した。

その日の夜から、浩志の修行（自称）が始まった。

具体的に言えばただのジョギングだ。

彼の両親はおかんむりだったが、気にも留めていない様子だった。

「なあ、浩志」

「なに？」

ジョギングにつき合わされている大輔は、心配そうな声で浩志に言った。

ひとしきり走って、今はクールダウン中、歩いているところだ。

「お前、マジか？」

「何が？」

「だから、ハリウッド」

「ああ」

彼は大きく頷いた。

「もちろん！」

「あいな」

「ん？」

「マジで、いけると思ってんのか？ハリウッドってアメリカだぞ。遠いんだぞ！」

問題はそれだけじゃないのだが。

「そりゃあ、いけるさ」

だって、ジャッキー様はいつも不可能を可能にしてるんだからな、と浩志は言う。

「だからさあ、そういうことじゃなくて……」

「む！」

突然鋭い声を発した浩志に、大輔は驚いた。

「な、なに？」

「カツアゲだ！ピンチだ！」

そつちを振り返ると、数人の男が一人の少年にたかっているところだった。

「あ、ホントだ……。あれ、この辺の高校生の不良じゃん」

「よし、いくぜ」

「ええ！」

どう見ても勝ち目のなさそうなケンカを売りに行こうとする友人を大輔は必死で止めた。

「落ち着けて！」

「いや、ここでいかなかったら男じゃないぞ」

「だからさあ。人呼んでくるとか、あるだろ？」

しかし浩志は首を横に振った。

「大丈夫だ。俺は負けない」

「なんで……」

根拠のない自信に満ち溢れる彼を見て、大輔は半分涙目になる。

「俺はこれまで、ジャッキー様の技をずっと研究してきたんだからな」

そう言い残すと、颯爽と駆け去っていった。

「浩志……」

あれは、研究とは言わないよ。

あんのじょう、浩志はぼこぼこにされた。ジャッキー様の技もかたなしだ。

助けに入った大輔も一緒にぼこぼこにされた。

財布も持っていかれてしまった。

「うう。大丈夫か？」

「ちつくしょう……！なんで」

二人は身を起こす。全身が痛い。

「なんでジャッキー様の技が通用しないんだ」

「あのなあ。あれ、映画だから」

「……………」

浩志は黙り込んで、夜空を見上げた。

「……浩志？」

「……はあっ！」

突然、浩志の掌が大輔のおでこを強打した。

「うおっ！？」

ひっくり返る。なかなか痛かった。

「なにしゃがる！」

浩志は悪びれる様子もなく、にやついて言った。

「ほら。この技、通用するじゃないか」

「……この野郎！」

へらへら笑うバカに飛び掛る。そのまま取っ組み合いのケンカになった。

「かかって来い！ウー・ファン！」

「うーはんじゃねえ！」

「ほあちよお！」

「いてっ！畜生！」

先ほど不良たちにカツアゲを食らっていた少年だけが、横であたふたしていた。

体力の限界が来て、二人ともあお向けにぶっ倒れた。

鼻血とかも出ている。

「はあ……はあ」

「はあ……あは、はは……」

「はは、はは……！」

なぜだか笑いが止まらない。

ひとしきり笑って、ふと浩志が言った。

「きれいだな、星」

「……ほんとだ」

星座とか星の名前なんかはまるで知らない。

星、で十分だった。きれいな、星。

「……なあ、バカ」

「なんだよ。バカ」

「お前さ。マジでいくのか？アメリカ」

「オフコース！」

「……そか」

大輔は上体だけ起こして、バカを見下ろした。

「……いいな。バカって」

バカは黙って夜空を見上げていた。

（後書き）

僕はジャッキー様のファンです。大ファンです。

こんなお話を書いたのも、その影響が八割がたです。

ちなみに作中にある映画のシーンですが、現実にはありません。
バカって、いいです。

これを読んでくださった方いましたら、本当にありがとうございました。
感想なんかもお待ちしてます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2172a/>

リトル・ジャッキー（バカ）

2010年10月31日04時41分発行